

## ベルリン・アンメ牧師歓迎 特別演奏会

東京バッハ合唱団の過去4回にわたるドイツ演奏旅行に、受け入れ側の中心としてご尽力いただいたベルリン・ケペニック、聖ラウレンティウス教会元牧師グンドルフ・アンメ師が9月3日(日)に成田に到着し、ドイツ・東アジアミッション代表団の一員として9月23日まで日本各地を訪問されます。滞在期間中の9月9日(土)は、ちょうどアンメ牧師の自由日で、しかもお誕生日にあたります。私たちは、1997年のドイツ巡演から3年ぶりに再会して、歓迎の1日をすごす予定です。翌10日(日)には信濃町教会で、アンメ牧師は説教をされることになっています。

この春、御長男ヨハネス氏を42歳の若さで天に送られ、私たちは5月14日の演奏会を、ヨハネス氏の追悼の気持ちもこめて、ささげたものでした。それに対して、アンメ牧師から次のようなメッセージが届きました。9月9日には、あらためて直接、アンメ牧師にカンタータ106番をお聴きいただこうと思います。

「5月14日の演奏会で、私どものヨハネスをしのんで歌ってくださるとのこと、ありがとうございます。当日は私たちもヨハネスを追悼するとともに、あなたがたに思いを馳せ、このように祈ります。—神よ、彼に永遠の光をあたえ、永遠のいのちを授けてくださいますように。—」

この演奏会は、特に広告をしません、どなたでもお聴きいただけます(入場無料)。また、アンメ牧師にお聞かせするため、2曲ともに原語による上演となります(カンタータ106番:ドイツ語、小ミサ曲ト長調:ラテン語)。先の定期演奏会のとくとは異なる趣きをお楽しみいただけたらと思います。ぜひとも、お誘い合わせでご来場ください。

### 特別演奏会

2000年9月9日(土) 16:00-17:30

会場:世田谷中央教会

#### プログラム

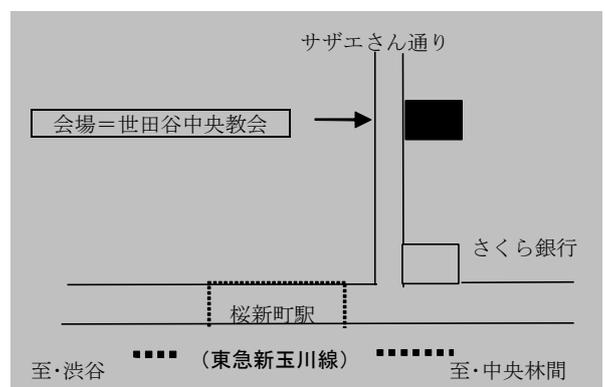
- ①合唱:カンタータ 106 番《神の時は いとも正し》  
(BWV106)全曲…原語
- ②あいさつ:グンドルフ・アンメ牧師
- ③合唱:小ミサ曲ト長調(BWV236)より…原語  
キリエ、グローリア、ドミネ・デウス、  
クム・サンクトゥス

#### 演奏者

ピアノ:内山亜希  
合唱:東京バッハ合唱団  
指揮:大村恵美子

#### 入場無料

(会場下車駅:東急新玉川線「桜新町」4分)  
(世田谷区桜新町 1-14-22)



<月報7月号内容>

没後250年に日本語版楽譜で歌ったバッハ…松尾茂春(P2)

第87回定期演奏会を聴いて/憲法第9条の力と価値について…野村勝時(P3)

カンタータ第16番の頃のバッハ…大村恵美子(P4)

## 没後 250 年に日本語版楽譜で歌ったバッハ

バス 松尾 茂春

さる5月14日(日)に石橋メモリアルホールで行われた東京バッハ合唱団第87回定期演奏会は、2つの意味で記念すべき演奏会でした。1点は言うまでもなく、バッハ没後250年にあたる年の最初の演奏会、そしてもう1点は念願の東京バッハ合唱団出版局発行、日本語版楽譜「バッハ・カンタータ50曲選」(ドイツ・ブライトコプフ社提携)を使っての初めての演奏会という意味においてです。

### 記念の年に<生と死>のカンタータを歌う

2000年の今年、大バッハ没後250年を記念して、日本でも、世界でも、その名を冠した演奏・各種イベントが名を連ねているのはいうまでもありません。たとえば、バスの山下さんの編纂による「バッハ演奏会カレンダー」(小冊子の他、インターネットでも見られます - 合唱団のHPからリンク済)を一望しただけでもその盛況ぶりがわかりますが、そのような中、東京バッハ合唱団の演奏会はその選曲において格別意味のあるものと思えます。すなわちマタイ、ヨハネの両受難曲、ロ短調ミサといった超大作を取り上げた演奏会が目白押し(もちろんその事はバッハ・ファンにとって実に嬉しいことですが)である一方、<生と死>をテーマとして関連の深いカンタータを選び組み合わせたプログラムはそうは見あたりません。このような意義深い演奏会に参加できたことを嬉しく思います。

今回演奏した作品は、いずれも生え抜きの名曲であると共に、私個人にとっても思い出深い曲が多かったことで格別印象深いものでした。はじめにそのような観点から感想を記させていただきます。まず、演奏会前半1曲目のカンタータ第156番《墓に片足入れ》。有名な冒頭のシンフォニアを味わい聴くと共に、演奏される機会の少ない全曲を眺める良い機会を得たと思っています。

2曲目のカンタータ第106番《神の時はいともただし》は1969年、1976年に続く再演になりますが、1976年の演奏では、通常この曲についてまわるブロックフレーテの音域の問題を、キーを半音あげることで回避(原譜のEs-durに対して、ブロックフレーテは半音低く調整した楽器でF-dur譜を吹き、他の楽器はEs-dur譜をE-durに急遽修正して演奏)した時の様子が思い出されます。今回は新バッハ全集に

よるF-dur譜を使ったため器楽の問題は解消したわけですが、Es-durのボーカル・スコアのまま高い調で歌われたソリストの方々は前回にも増して苦労されたことでしょう。一方、全音上がったことによる合唱への影響となると、人により様々と思われませんが、個人的には歌いやすくなった — 少なくとも物理的に無理だった低いEsがなくなった — 反面、何か色合いの違いのような印象が払拭できませんでした。とはいえ、この希有の名曲を感動深く歌えたのは素晴らしいことでした。思い入れの強い曲だけに、もっと入念な練習をもって大切に歌っていきたくったという思いが、自分自身を含めた合唱団全体に対してあるのですが、その気持ちを、野尻湖での演奏会以降に繋げていきたいと願っています。

後半1曲目のカンタータ第56番《十字架を勇みて負わん》については、私が合唱団に入って最初の野尻湖合宿にて、その時ご指導いただいた渡邊明先生が神山教会での演奏会にて自ら指揮と独唱をされた時の印象が心に鮮烈に焼き付いています。以来、この合宿に欠かさず参加するようになったのも、あの虫の音に囲まれた湖畔の会堂での演奏会に魅せられたからなのかもしれません。その時の同じ渡邊明先生による味わい深いソロを聴き、それを受けてあの深遠な中に光りが射し込むような「天国に行き着く」コラールを歌う時、自分が大変に密度の濃い時間の中にいることを思わされました。

後半2曲目、最後のプログラムである小ミサ曲ト長調。これは、言うまでもなく、かつての長崎演奏旅行を思い出させてくれます。レデンプトリスチン修道院での地元カトリックの合唱団との交歓演奏、修道女の方々の清らかな歌声、銀屋町教会での演奏会、バプテスト教会での音楽礼拝、原爆記念館での衝撃…そういえば「ながさき」という文集も作りましたね。

### 東京バッハ合唱団版の楽譜で歌う

さて、「バッハ・カンタータ50曲選」が遂に出版となり、まずは練習時に渡された中の1冊をしげしげと眺めました。落ち着いたオレンジ色を基調とした表紙 — 中を開くと、原語に並んで、大村先生訳のテキストが大変見やすく配置されています。全体の仕上がりも期待以上。かつて入団して間もない頃に一回こういったプランを耳にし、その後長年密かに期待し、また1998年の野尻湖合宿の際に発刊への希望を語らせていただいた者としても、大変嬉しいことでした。

バッハの作品が、もし楽譜という形で残されていなかったら、その計り知れない賜は、その時代の一

地域の一握りの人々の間に留まってしまったことでしょう。オリジナル譜や写譜が残り、さらに出版された事とおして、現在という遠い時代の、日本という遠い国の私たちもその作品を楽しみ、味わい、心打たれ、癒され、励まされ、祈りを与えられることができるように、大村先生の貴重なライフワークであるバッハ作品の邦語訳も、出版を通して、時代・地域共に広く活用されていくことでしょう。

月曜日の練習の帰り道等で話すうちに、この制作にあたって、元の譜にパソコンを駆使して日本語を挿入するという、精密で神経を使う作業をして下さっているのは、テノール大村さんである事を知りました。脱帽です。縦割りの平板な曲ならともかくも、精緻なポリフォニー主体のバッハの作品 — その入り組んだ声部個々に歌詞を書き込むことは格段に骨の折れる作業であることでしょう。その大変さと価値がわかるだけに、この出版楽譜を手にしての練習、またそれを使っての演奏は、私にとって特別な感慨のあるものでした。この素晴らしい出版譜を使って演奏できることを嬉しく思うと共に、今後、合唱団内外で広くいつまでも使われ続ける事を願う者の一人です。

さて、演奏を終えた時、練習時に比べて、充実感がありました。いつもながら各ソリストの方々の力量、オーケストラ、そしてバッハの作品そのもの等に負うところが多いと感じますが、合唱についても、合唱団としての一つの響きがあること、また今日まで外部からの臨時の応援なしに演奏を続けて来た点は誇れる事と思います。しかし、今の状況に甘んずることなく、今後、本番並みの密度を練習の早い時期から保つこと、もっと響きを磨くこと、作品への理解と思いを密にすること・・・多くの方の思いと期待に、私も以上を加え、共に前進したく願っています。

## 第 87 回定期演奏会を聴いて

野村 勝時 (後援会員)

(第 87 回定期演奏会のあと、後援会に入会された野村勝時様が、次のようなお便りをくださり、またその後ひきつづいて、「憲法第 9 条の力と価値について」という文章をご寄稿くださいました。)

5 月 14 日の演奏に、たいへん深い感銘を受けまし

た。バッハの音楽は、どうしても心に滲みるのでしょう。先生がバッハ一本に徹しておられるのが分かるような気がいたします。人間の肉声とそのハーモニーで人の魂を浄化するものは宗教音楽 — 特にバッハだと痛感いたしました。

[...]月報 1、2 月号の「声」に述べておられる先生のご意見には全く同感です。バッハもオーストリア継承戦争のとき、『平和の君 イェス』BWV116 を作曲したとのこと、たいへん教えられました。カントもずっと後になりますが、1795 年に『永遠平和のために』を書いています。これはおそらく近代平和論の源でしょう。日本の政権政党の政治家が、バッハを愛好し、カントを理解していたら、新憲法を泥まみれにして戦争ができる“普通の国”に日本をしようとするような馬鹿な政治をするはずがないと思います。[後略]

## 憲法第 9 条の力と価値について

5 月 27 日、隅谷三喜男先生の「沖縄の心と日本の未来」という講演を、大村恵美子先生と一緒に拝聴し、深い感銘を受けました。

米軍の侵攻と激戦が行われたのは日本本土の中で沖縄だけでした。激戦の結果、米軍戦死者 12,000 人 (太平洋戦争での米軍最大の犠牲者数)、日本軍 60,000 人、民間人 150,000 人が、日本本土の我々のために死んだことを忘れてはなりません。この悲劇にかかわって、私には是非多くの人に聞いて欲しい話があるのです。それは一橋大学法学部長、山内敏弘教授 (憲法学) の次のような話です。

沖縄県南部に慶良間 (けらま) 諸島があり、その中に前島という島があります。米軍は、1945 年 3 月 26 日に慶良間諸島の阿嘉島に上陸を開始した。日本軍は為すすべもなく壊滅し、日本軍の隊長は、老若男女を問わず自決を命じた。悲惨な集団自決による死者は、座間味島 172 人、渡嘉敷島 350 人、慶良間島では 40 人を数えた。ところが同じ慶良間諸島の中で、前島だけは米軍の攻撃もなく、住民の自決も皆無であったという。日本軍の或る隊長が島に来て、護ってやるから協力しろと言ったとき、前島の或る校長先生は、国際法の知識があって、国際法では一切の武装の無い人々や場所を攻撃することは禁じられているのだから、自分たちはそれに賭けてみる。だから護ってもらわないと言って、日本軍の守備を断ったそうだ。その拒絶を承知した隊長の見識も立派だが、その校長のおかげで、一切の武装を放棄

した前島は、米軍の攻撃から完全に除外され、死者はひとりも出なかった。

50 数年前に、新憲法第 9 条一武装放棄による安全と生存を保持することを決意している一、この第 9 条を地で行く上記の事実があったことに深い感動を感じる。世界の憲法史上最高の理念に到達した、我々の憲法の前文を血肉化していかななくてはならない。

「日本国民は恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理念を深く自覚するのであって、平和を愛する諸国民の公正と信義に依頼して、我等の安全と生存を保持しようと決意した。」――

改憲論者は、これを単なる理想主義であり、現実の政治の世界では役に立たないと言います。果たしてそうでしょうか。憲法 9 条が無かったら、朝鮮戦争、ヴェトナム戦争に間違いなく巻き込まれていたはずです。湾岸戦争でも 1 兆円もの上納金をふんだくられて済みました。当時のブッシュ大統領は口惜しくてたまらなかったでしょうが、第 9 条が彼の前に立ちはだかったのです。

最近韓国が市民運動に力をつけてきて、政府与党に働きかけ、真相究明法というものを作りました。これをもって、韓国軍がヴェトナムの良民を虐殺したこと告発し、補償すべきであると政府に迫ってい

ここで、1723 年、1724 年、1725 年のクリスマス。韓国市民は、どこかの政治家と違って桁違いに立派で、韓国が道義の国であることを世界に示しています。もし韓国に第 9 条があったら、アジア人同士の殺戮という無残な事態は避けられたでしょう。

色々述べてきましたが、憲法第 9 条はこれほどの力と価値をもっています。それなのに日本の政権政党の 50 年の歴史は、我々の新憲法とその第 9 条をいかに骨抜きにするかの歴史でした。絶対君主制国家が敗戦したとき、我々民衆に与えられた天与の恵みの新憲法の価値について、全く無知の日本の支配層とは反対に、世界の国々が日本の憲法、特に第 9 条の価値を認識し始めています。1999 年 11 月のハーグにおける国際市民運動協議会の 10 か条の決議の第 1 決議に、各国の市民運動家は、各国の政府が日本の“憲法第 9 条”を制定するよう働きかけるように、と述べています。アメリカにも憲法第 9 条研究会が発足しています。スペイン領カナリー諸島の「広島・長崎公園」に、スペイン語の憲法第 9 条の石碑が立っています。

Gloria in excelsis Deo. Et in terra pax hominibus bonae voluntatis. (天に栄光、み神にあれ。地に平和、善意のたまにあれ)。

## カンタータ第 16 番の頃のバッハ

大村 恵美子

カンタータ第 16 番《主 ほめ歌わん》(BWV16) は、1726 年 1 月 1 日、バッハが 1723 年にトーマス・カントルに着任してから 3 回目のクリスマス・シーズンに書かれた。周知のように、クリスマス前の期間は大きな音楽がひかえられ、12 月 25 日の降誕節第 1 日から 1 月 6 日の顕現節にかけての 2 週間には、

降誕節第 1 日 (12 月 25 日)

降誕節第 2 日 (12 月 26 日)

降誕節第 3 日 (12 月 27 日)

新年 (1 月 1 日)

顕現節 (1 月 6 日)

と、5 回の定番のほか、その年のカレンダーによっては、あいだに複数の日曜も入れて、7 回あるいは 8 回分のカンタータが用意されなければならなかった。着任早々のバッハは、それらの機会に労をいとわず、ほとんど新作のカンタータを披露していったのである。

ス期に初演されたカンタータをあげてみよう。着任して最初のクリスマス第 1 日 (25 日) には、《マニフィカト》BWV243a の大曲や、1716 年に作曲されていたカンタータ第 63 番などが充てられたため、新作のカンタータとしては、翌 26 日の BWV40 からとなる。

(\*印=当合唱団の既演曲)

### 【1723 年クリスマス期】

12 月 26 日: BWV40《神の子の 現われたまいしは》\*

12 月 27 日: BWV64《見よ 父のわれらにたまいし愛の》\*

1 月 1 日: BWV190《主に向かい新しき歌を歌え》\*

1 月 2 日 (日曜): BWV153《見よ いかにかわが敵ども》

1 月 6 日: BWV65《もろびと シバより来たりて》\*

### 【1724 年クリスマス期】

12 月 25 日: BWV91《ほめ歌わん 主イエス》\*

12 月 26 日: BWV121《われら まさにキリストを讃うべし》

12 月 27 日: BWV133《われら 汝にありて喜び》\*

12月31日(日曜):BWV122《新たに生まれし みどり児》  
 1月1日:BWV41《イエスをほめよ 新たな年に》\*  
 1月6日:BWV123《いと愛するインマヌエル》  
 【1725年クリスマス期】  
 12月25日:BWV110《笑いは われらの口に満ち》\*  
 12月26日:BWV57《試練に耐うる者は幸いなり》  
 12月27日:BWV151《甘き慰め わがイエス来ませり》\*  
 12月30日(日曜):BWV28《ほむべきかな 年終わり》\*  
 1月1日:BWV16《主 ほめ歌わん》(\*今回)

そして、次のクリスマス期からは、バッハはこのような勤勉さをぱったりと無くしてしまう。すなわち、ライプツィヒの最初の3年が、クリスマス音楽としても、集中的に多作な時期だったわけである。

これらのクリスマス・カンタータには、それぞれに鮮やかな対照をなす特徴が見られるが、どれをとっても、みなぎるような生命力に心踊らされる。ほんのわずかな試みとして、いま、2つのカンタータを、われわれのカンタータ第16番《主 ほめ歌わん》と比べながら、豊かなバッハのクリスマス音楽の世界に分け入ってみよう。その2曲とは、1724年1月1日初演の第190番と、1725年12月30日初演の第28番である。

## 第190番と第16番

カンタータ第16番の構成

- 第1曲:合唱〈主 ほめうたわん〉
- 第2曲:バス・レチタティーヴォ〈この喜ばしきとき〉
- 第3曲:バス・アリア〈祝福あれば〉と合唱〈声あげ よろこばん〉
- 第4曲:アルト・レチタティーヴォ〈尊きみことば〉
- 第5曲:テノール・アリア〈愛するイエス なれのみ〉
- 第6曲:コラール〈みめぐみ 讃えよ〉

第16番の中心は、第3曲バス・アリアと合唱にある。古風なルター訳ドイツ語《テ・デウム》の編曲で冒頭合唱(第1曲)が始められるが、第2曲のバス・レチタティーヴォをはさんで第3曲になると、

という躍動する喜びのリズムに乗って、“声あげ よろこばん”という歓声が、各声部から沸きあがる。これは、同じ のリズムから始まる第190番《主に向かいて新しき歌を歌え》の冒頭合唱によく似ている。そして、どちらも対位的な発展はあるものの、この特徴的な最初の和声的な掛け声によって、近代的に明かるい大合唱という圧倒的な印象を与える。

また、第190番第1曲では、曲の中心、フーガに

移行するところで、突然“主ほめうたわん”と、ユニゾンがドイツ語《テ・デウム》の冒頭(第1行)を挿入し、また最後の“アレルヤ”の部分に入るところで、《テ・デウム》のつづき“感謝をささげん”(第2行)がユニゾンで歌われる。たいへん効果的なユニゾンの使用である。

ひきつづき第190番第2曲では、この《テ・デウム》の2行が2回反復されて4声体で歌われ、その間をバス・レチタティーヴォが神への感謝を歌いつないでゆく。

この《テ・デウム》というのは、中世からのラテン語の神への讃歌であり、1529年に、早くもマルティン・ルターによってドイツ語に訳して歌われ、バッハ自身も4声体コラールの形に構成している(BWV328)。全体は、数十行に及びしかも反復も多い、たいへん長い教会旋法の歌で、その冒頭のわずか2行を第190番で、4行を第16番で用いているにすぎないが、それだけの短い旋律で、教会の伝統の重みを十分に思っておこさせる効果をもっている。

第16番では、第3曲にはまったく現われなかわりに、冒頭合唱曲が、この《テ・デウム》の4行に基づくコラール変奏曲の形を全面的にとっている。

Herr Gott, dich loben wir, (主 ほめうたわん)  
 Herr Gott, wir danken dir, (感謝を ささげん)  
 Dich, Gott Vater in Ewigkeit, (とわの父なる 主)  
 Ehret die Welt weit und breit. (ほまれ あまねし)

もう一つの共通点は、この日の、イエスの命名という福音書章句(ルカ2,21)をうけて、“イエス”と呼びつづけ、自分にとって最上の宝、とたたえるアリア。第16番では第5曲テノール・アリア、第190番では第5曲テノール・バス二重唱。どちらも抑制がきいておちついた調子の、男声の魅力をよく活かした歌になっている。

最終コラールは、どちらも、《テ・デウム》とは無関係のもので、一年の感謝と新年の希望を祈る内容。

## 第28番と第16番

第190番と第16番は、2年ほど隔たった、どちらも新年用のカンタータだったが、第28番《ほむべきかな 年終わり》は、第16番よりもわずか2日前の、年末の日曜日のためのカンタータである。バッハが、年末と年始といっても中1日をおいただけの間に、どれほど意欲的な演奏を心がけたかということの、みごとな一例としてご紹介するのだが、こんな多忙

な演奏日程を、ともかくもこなしていった当時の作曲家、演奏者、すべての関係者には、脱帽のほかはない。

この2つのカンタータの、最終コラールは、エーバーの〈われとともに神のいつくしみを讃えよ〉*Helft mir Gottes Güte preisen* (1580 頃) の第6節という、同じものである。レームス作詩の台本には最終コラールがなかったので、2日前に演奏した第28番(台本はノイマイスター作詩)の最終コラールを、バッハがそのまま用いたものである。第28番は過ぎし一年への感謝、第16番は来たるべき新年への希望という、カンタータ全体の内容のちがいを締めくくるのに、どちらにもふさわしい最終コラールだと、バッハが判断したのだった。

その後、カンタータ作曲としては、不毛の数年がつづいてから、1734年-1735年(バッハ49歳)に、

『カントル・バッハ』の連載分は、全体の6章のうち、クリスマス音楽の集大成となる《クリスマス・オラトリオ》全6部が完成する。これこそは、12月25日から1月6日にいたる6回の祝日(1回の日曜を含む)に、1曲ごとのカンタータをあてた、しかもその全体がすばらしい構成の統一をもつような、モニュメンタルなクリスマス音楽の大宇宙だった。ライブツィヒにおけるバッハの最初の10年間は、このようにしてゆるぎない結実を得ることになった。

私たちも、バッハの個々のクリスマス・カンタータを、1年ごとに1曲ずつたどりながら、さらに《クリスマス・オラトリオ》を、前半3部と後半3部とに分けながらではあっても、毎年演奏しつづけることで、バッハの息長い労苦の末の偉業をしのぶことにしているのである。

---

## バッハ・カンタータ 50 曲選 出版ニュース No.5

「バッハ・カンタータ 50 曲選」第2集は、来年5月の第88回定期演奏会の上演曲であるBWV29《み神に謝しまつらん》とBWV140《めざめよと呼ばわるものみの声高し》の2曲を年内に刊行し、他の8曲も含めて全10曲を、演奏会当日に発売する予定です。

第2集の内容は、上記2曲のほか、BWV36、39、41、42、45、61、63、68の、いずれも名曲ばかりです。

なお、第88回定演の演奏曲目は、BWV9、51、29、140の4曲ですが、BWV9、51の2曲は、出版計画の中には入っていません。

### 『カントル・バッハ』をお頒けします

セバスティアン・バッハの新しい伝記『カントル・バッハ』(ポール・デュ・ブシェ著、大村恵美子訳、A4判、本文44ページ、簡易製本)が、7月3日に出来上がります。バッハ没後250年企画として実現したものです。合唱団員の方々には全員にお読みいただきますが、後援会員、団友の皆様も、合唱団の志をご理解いただき、ご購入いただければ、さいわいでございます。ご希望の方は同封振替用紙でお申し込みくださいますよう、おねがいいたします。(頒価1200円、送料共、もちろん何冊でもけっこうです)。

なお、ご好評いただき、月報前号で完結した『カ

最後の5、6章、つまり3分の1にあたります。未発表の1-4章は、バッハの誕生(アイゼナハ)から、修行時代、アルンシュタット、ミュールハウゼン、ヴァイマル、ケーテン時代と、ライブツィヒ定住までの、多彩な足取りをたどるもので、ライブツィヒ期の5、6章と併せて、ぜひお読みいただきたいとねがっております。

### 訳者あとがき

「バッハ没後250年を記念して、バッハの伝記の新しいものを合唱団関係者の皆様と手にできればと、ねがっていましたが、この本は、著者が若いフランス女性ということで、見方、書き方など多方面で新鮮なものがあり、そのうえ挿入イラストも、パリ国立図書館をはじめとする、これも目新しいものが多く含まれている、という特徴が、私の希望にかなったものと思われました。

原書は新書版サイズの、ガリマール《発見》叢書の体裁ですが、簡易製本のコストを下げるためA4判とし、また原書に多く含まれるカラー写真も、全部白黒とするため、効果の不鮮明なもの、また本文にあまり影響しないようなものを割愛して、1ページに1、2点としぼり、原書の約170点のうち60点を入れました。巻末の資料集も、採用したイラストの出典以外は切り捨てることにしました。

このようにして、著者の描いたバッハの生涯の全体像に重点をおいたつもりですが、この記念の年に、私たちがバッハの一生をもういちど見直して、親しみをいただくよすがとなることができれば、さいわい

だと思ひます。

2000年7月3日」